

敬語と文末表現に見る 若い女性のことばの変容

小田三千子

1. はじめに

敬語は日本語の大きな特色の一つであり、日本人女性のことばは男性のことばよりも、一般に丁寧で優しいと言われてきた。しかし現在特に若い人の間では敬語が変化していると言われる。また女性のことばと男性のことばが近づいているとも言われる。そこで、無敬語地帯と言われる宮城県仙台市の若い女子の大学生を中心にして、二人会話での敬語使用の実態を調べている。その一端の中間報告をすることが、このエッセーの目的である。

幾世代にもまたがった親しい女性同志の話し言葉の調査研究において、特に若い女性のことばが、男性のそれに近づいていることがこれまで指摘されてきた(例-S. Okamoto & S. Sato 1992; S. Okamoto 1996; M. Oda 1998)。男女差縮小の現象は、若い女性が先輩や後輩と話すさいに使用する敬語や文末表現にもみられる傾向であることを、今回の調査結果は示している。

2. データ

主データは1999年7月に仙台市で収録された二人会話のオーディオ・テープ5本とそのタイプスクリプト(テープを書き起こしたもの)である。計10名の仙台出身女子学生が先輩あるいは後輩の女性と約30分間にわたり、「共通語と地域のことば」というテーマでしたおしゃべりを録音したものである。

補助データは、二人会話を録音した30分のオーディオ・テープ4本とそのタイプスクリプトである。二人の組み合わせは、録音の責任者(左)の観点から見ると、男女、女男、男男、女女となっている。おしゃべりのテーマは主データのものと同じである。女性同志だけの会話からなる主データと比較する目的で、補助データを使用した。

調査項目は、ジェンダーと結びつけてこれまでしばしば取り上げられてきたいわゆる敬語と文末表現である。敬語には、です／ます形も含むものとする。文末表現については、McGloin (1991)とOkamoto & Sato (1992)を参考にして分類した。MF(moderately feminine)、SF(strongly feminine)、MM(moderately masculine)、SM(strongly masculine)、N(neutral)の5分類である。

資料を見ると、です／ます形あるいは敬語が使用される度合いは、同一ジェンダー内でも差が大きくなっている。しかし主データのSUB(目下)は、1人を除いてすべてが、SUP(目上)よりも、です／ます形を多く使用している。尊敬語や謙譲語の方は、主データのSUBは1人も使用していない。しかし、補助データにおいては、SUBの男性(22才)がSUPの男性(1学年先輩)に対して尊敬語や謙譲語を使用している。またSUBの女性(21才)とSUPの女性(46才)も互いに使用している。主データおよび補助データで使用される敬語は、すべて聞き手に向けられた敬語であり、第三者に対して使われたものは無い。

3. ディスカッションと結論

本稿の資料を分析した結果まず分かることは、若い女性の話しことばにも、大きなスタイルの違いがあることである。例えば、一般に主データのSUBはです／ます形をより多く使い、SUPはMMまたはSMの文末表現をより多く使う。しかし使う頻度は個々人によって異なっている。従って、若い女性ことばにみられる丁寧表現の違いは、Jorden(1990:2)のいう連続体で示するのが適切であると考えられる。

また、聞き手指向の敬語の使用は観察されたが、第三者に対する敬語の使用例が無かったことは、井上(1999:4)に報告されている、現代の若者の話しことばの傾向に関する観察と一致している。

さらに、補助データにおいて、21才の男性が、22才の女性先輩と話すさいに、MMやSMよりもMFの文末表現を多く使っている。これは若い男女の話しことばが、互いに近づいていることを示す1例と言える。

また、主データの女性SUB 1名と、補助データの男性SUB 2名(相手は、そ

れぞれ女性SUPと男性SUP)は、相手のSUPに対して、徹底して敬語を使っている。これは一般に、大学における学年の違いが、部活での先輩・後輩の決め手になると言われることと一致する(例: 井上 1999:175)。男性SUPと話す男性SUBは、尊敬語や謙譲語まで使っていることが観察される。

しかし、本資料で目立つ例外として、1年生の女性SUBが4年生の女性SUPに、友達ことばである「ため口」を一貫して使っている例が挙げられる。前者は、言語修得の最適期に米国に数年住んだ経験を持つ。後者は、所属大学の優等生であるが、前者と共に、生まれて初めて米国に間もなく留学しようとしている。国際経験から見ると前者は先輩になり、そのような意識から前者は大学での先輩に敬語を使わないと考えられる。

もう一つの例外は、同じゼミ所属の4年生の女性SUBが、別の4年生の女性SUPに敬語を使っている例である。SUPは、1才年上であり、オーストラリアで日本語教育の助手をするために1年休学して戻って来た。この例も、SUPに国際経験があるために、SUBが、敬語を使っている例と考えられる。

上記二つの例外から推察できることは、敬語使用の基準が、伝統的な身分の上下関係に基づくものから、民主的な能力主義に基づくものへと変化してきていることである。年功よりも能力が日本の企業で重視されてきていると言われるが、そのような社会の傾向が敬語に反映されていると思われる。

以上に見てきたように、本稿の資料で見えるかぎり、日本の若者、特に若い女性は、自分に望ましい社会的意味を相手に伝えるために、当該コンテキストにもっとも適切と考えられる言語のストラテジーを選びながら、コミュニケーションをしている。そして、それがMilroy(1992)のいう意味での通時的変化を言語にもたらしめていると考えられる。

参考文献

- 井上史雄(1999)「敬語はこわくない」東京: 講談社現代新書.
- Jorden, E. H. (1990). "Overview." In: Aspects of Japanese Women's Language (S. Ide et al., (Ed.)), pp. 1-4. Tokyo: Kurosio.
- McGloin, N. H. (1990). "Sex Difference and Sentence-Final Particles." In: Aspects

- of Japanese Women's Language (S. Ide et al., (Ed.)), pp. 23-41.
Tokyo: Kurosio.
- Milroy, J. (1992). *Linguistic Variations and Change*. Oxford: Blackwell.
- Oda, M. (1998). "Gender-based variation in modern women's language." *Actes du 16e Congrès International des Linguistes* (Paris 20-25 juillet 1997) (B. Caron, (Ed.)). Oxford: Elsevier Sciences (in CD-ROM).
- Okamoto, S., and S. Sato (1992). "Less feminine speech among young Japanese females."
In: *Locating Power* (K. Hall et al., (Ed.)), pp. 478-488.
Berkeley, CA: Berkeley Women and Language Group.
- Okamoto, S. (1996). "Indexical Meaning, Linguistic Ideology, and Japanese Women's Speech." In: *The Proceedings of the 22nd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (1996), pp. 290-301.